

松嶋夜話 卷之下 3

〔原文〕余之青年時將疴于小野水月庵

〔訓読〕余が青年の時、疴を小野の水月庵を將(やしな)ひて

〔原文〕有客來宿

〔訓読〕客有り来り宿す

〔原文〕爐話次勉余曰

〔訓読〕爐話の次、余を勉めて曰く

〔原文〕洛有丹水子者

〔訓読〕洛に丹水子という者有り

※名古屋丹水…京都の人。名は玄醫。字は富潤・閔甫。號は丹水子・宜春庵。醫を業とす。經學を羽州宗純に學び、易に精しく、兼ねて老莊及び佛學に通ず。元祿九年四月十八日歿す、年六十九

〔原文〕洽覽妙統暨論

〔訓読〕洽覽して妙く暨論を統(おさ)む

〔原文〕行丹水子一篇見之

〔訓読〕丹水子一篇を行ふ、之を見て

〔原文〕曰薪火炭火俱有為害之謂

〔訓読〕薪火、炭火、俱に害を為す有りの謂を曰ふ

〔原文〕曰薪火微勝炭火烘烘

〔訓読〕曰く、薪火は微に炭火の烘烘たるに勝れり

〔原文〕争似煨榾柮而不甚遠

〔訓読〕争いて榾柮を煨(や)くに似て、甚だ遠からず

〔原文〕共宜防寒而養生焉

〔訓読〕共に宜しく寒を防ぎ生を養うべし

〔原文〕爐炭久炙面則損眼

〔訓読〕爐炭久しく面を炙らば、則ち眼を損なう

〔原文〕薪火亦薰煙深則可害眼目

〔訓読〕薪火亦た薰煙、深ければ、則ち眼目を害すべし

〔原文〕殊看山庵手折事燒松葉

〔訓読〕殊に山庵を看るに、手を折りて松葉を焼くことを事とす

〔原文〕而松煙薪火暈滓尤深者也

〔訓読〕松葉は薪火の暈滓し尤も深き者なり

〔原文〕串日必有翳高明乎

〔訓読〕日を串けば、必ず高明を翳（かげ）す有り

〔原文〕余日子問固然法昌遇老惜山房楫拙之煙

〔訓読〕余曰く、子の問固より然り、然れども法昌遇老は山房の楫拙の煙を惜しみ

※法昌遇禪師：禪師名倚遇。漳州林氏子也。为人奇逸。有大志。自剃发受具。即杖策游方。名著

丛林。浮山远禪師。

〔原文〕杜扉打坐

〔訓読〕扉を杜じて打坐す

〔原文〕適方有開戸呵責之

〔訓読〕敵たま方に戸を開けるもの有らば、之を呵責す

〔原文〕又廣慧延沼嘗藏風穴舊村院才然松脂

〔訓読〕又廣慧の延沼は嘗て風穴の舊村院に藏し、才かに松脂を然とす

※風穴延沼：晚唐から宋代にかけて活動した臨済宗の禪伯。臨済下々世。広順元年（951年）、

郢州の新寺に広恵寺の額を賜り20年間住持として大衆を指導した

〔原文〕未聞暇畏其害養其性體味其節操也

〔訓読〕未だ聞かず、其の害を畏れ、其の性體を養い、其の節操を味くする暇あらんを聞かず

〔原文〕只所余愁非眼目心盲而已

〔訓読〕只だ余が愁う所は、眼目には非ず、心盲のみ

〔原文〕盲目輕者金篋以可治之

〔訓読〕盲目の輕き者は金篋以て之を治す

〔原文〕只見諸仁開眼歷歷日夜見空中華

〔訓読〕只だ諸仁を見れば、開眼歴歴として、日夜空中の華を見る

〔原文〕是心盲之基也

〔訓読〕是れ心盲の基なり

〔原文〕心盲害也深矣

〔訓読〕心盲の害や深しと

〔原文〕客耳而唯唯退矣

〔訓読〕客耳きて唯唯退ぞく